

飛耳長目

通巻200号 令和2年7月1日発行

（昭和30年10月5日発行「開頭」第90号10月号）

執筆三昧

森 信三

1

この夏休みには、私をして、どうしてもしなければならぬ大仕事をする事ができたということ、ここに読者諸氏にご報告申したい。

端的に言ってそれは著述のための執筆である。それがあの大会への異常な準備の進行過程の背後を貫いて過ごして、またそれが私の生活であり、現実であった。この夏はいよいよ筆を執ろうかとは、6月に入る頃から、私の心を去来する最大の関心事であった。というのは、もうそろそろ私も何か理論的な一書を書いてよい頃だとは、かねて私の心中にあったことだからである。

だが考えてみると、私は50まで哲学を専攻した人間であって、いわゆる教育の書物というものは、ほとんど読んでいないのである。二年余り前から神戸大学に拾われて、教育学を担当するようになってからは、責任上からも多少は教育書を

読まねばならぬとは思いつながら、やはり自分の性に合わないものは心からは読めないものだということに悟った。それに年数もまだ短くて、せめてもう一年して来年の夏休みになったら何とか多少は書けるだろうと思ったりもしていた。

だが、今年の夏休みは、敗戦満十周年にあたるわけで、特に敗戦を国外で迎えて、その惨苦を身をもって体験した私にとっては、今年の夏休みは意義深い夏休みである。それにここ数年来デューイを多少は読んできたが、当初の頃は非常な感激を以て読めたデューイも、近頃ではその著述の冗漫さが多少鼻につきかけてきたので、ちょうどできものが治りかけて、カサブタの剥がれ落ちる直前には少しかゆくなる時のような感じもして、少々は熟し足りないかと思うが、やはり敗戦満10年を記念して、この夏休みに書くことにしようと思ひましたのは、すでに7月にも入ろうとしている頃であった。

2

そこでまず問題は、何を書くかという

ことであるが、それについては、私はすでに数年前から大体の方向としては決まっていた。というのはそれを私は、自分の世界観人生観の一応の帰結であるとともに、それがそのまままた教育論でもあのような一書を書きたいと念じていたからである。生涯を哲学の一人として過ごしてきた私、そして敗戦に伴う運命の転換により、人生の晩年にあたって、教育学を教えるようになった私にとつて、それはいわば生命の幻想ともいえるべきものであった。

とところが困ったことには、そのための典範とすべき書物が見あたらずに、このことであつた。すなわち世に哲学書は多く、教育の書物もそれに劣らずありはするが、今、私が以上述べるように、その一書がその人の世界観人生観であるとともに、そのまままた教育論でもあるというような書物は、あまり我が国に少ないばかりでなく、海外にも案外少ないようである。少なくとも私の知る範囲では、デューイの良書「民主主義と教育」ぐらいなものであろう。著述をする場合、私のこれま

での癖として、何か一冊卓れた人のすぐれた書物を眼底において、書くのを常としてきたが、今回は、それが得られないのである。強いていえばやはり前述のデューイの書物をあげるほかないであろう。

こうして私は、ひそかなる決意を抱いて夏休みに入るのを待った。講義は7月の十日で終わったが、いろいろと残務があつたりして、いよいよ筆を取り出したのは忘れもしない7月の22日の朝からであつた。もっとも私の心中には、今回の著述の萌芽は上に述べた理由からして、かなり以前から兆していた。書名の「教育的世界」という名を心に決めたのは、すでに一昨年あたりのことであつた。内容はある意味では、教育の哲学的考察であるともいえようが、しかし「教育哲学」などという非個人的な書名は初めから私の選択圏欄の外に置かれていた。いわゆる「教育原理」などというゴム印でも擦せるような書物は夢想だにした事はない。

3

さていよいよ執筆を始める事になった

が実は、一昨年の晩秋の候に、私はこの書の執筆を思い立って、初めの文章を書いていた。それは直接的には、学生のための講義案として、始めたのであつたが、やがて私は、そうした理論的体系的な講義が、講義案としては、ふさわしくないということを知り、途中で中絶した。

そこで今回の執筆は当然これの訂正改筆から取りかからねばならなかつた。そうして取り掛かつて見て、はつきりした事は、思想の基本骨髄的な点では、それは約二年前のことであつたが、当時と並べて大差はないが、同時に表現の微妙なニュアンスの上では、かなり、心持ちのズレのあることがわかつてきた。そのため私は最初の文章をまず、始めの一行からほとんど根本的に書き改めたと行って良い。そしてそれは、まるで古家の修理のように、ある意味では、初めから書き下ろすことに、時間と労力を要したと言つて良いほどであつた。かくして第4章以後になると、全然始めからの書き下ろしの世界に入つていったのである。

この辺で、私のこれまでの著述の仕方

をちよつと述べてみると、私は、ぽつりぽつりと、ウサギの糞のように小口論文を書いていくことはあまり肌に合わないので、ずっと頭の中……というよりはむしろ心の中に、さらには体の中に溶かし込み、蓄えておいて、それを時期が一たび来たら、それらの全部を、全体を一望のもとに展望しうる立場に立って、

私の一気呵成に書き下ろすという流儀である。私の旧著は皆そうした立場と流儀によってできたものばかりである。

そのために、私の筆の進みはずいぶん速い方のようなのである。あの「恩の形而上学」はちょうど30日間で下稿が出来上がったし、「学問方法論」の如きは、賞味16日間で、一応の下稿は仕上がったのである。

そこで今度の書物も、何とかして夏休み中には、是非仕上げたいと思っていた。というのとは右のような書き方ゆえ、一気に仕上げてしまわないと、後がうまく仕上がらないからである。ところが今度でいちばん気がかりだったのは、開頭舎の研究大会であった事は言うまでもない。

これだけは種々の関係上出ないというわけにもゆかず、さりとて中絶されることは、以上の理由によって絶対に辛いことであつた。

4

ところがいよいよ執筆を始めてみると、意外に筆が進むである。大体一日平均400字詰め原稿用紙で30枚前後を、毎日一気呵成に書き続けてきたのである。そのために、すでに8月3日の夕刻には予定の八章の下稿を無事仕上げるといふ、一種奇跡に近いスピードが出た。その間の日数まさに13日の短さである。戦前の復興の理論的な書物「学問方法論」に比してさらに3日間の短縮である。

そこで私は、間髪おかず、さらに姉妹篇としての第2著にとりかかることにしたのである。それはさすがに私としても全く予定していなかったことである。実は戦前「恩の形而上学」について「学問方法論」を書いたように、今回も「教育的世界」を書いた後一、二年間置いて、新しい立場からの「学問方法論」を書い

てみたいとは、内々考えていたことであるが、最初の書物が、あまりにも早く仕上がったので、即日思い立って翌4日の朝から、第2著にとりかかることにしたのである。

この第二著の方は、書名としては「教育における学者と実践家」ということにしたいと思っている。それは一昨年神戸大学にご厄介になつて、最初に同大学の紀要に書いたのは「学者と実践家」という題名のもので、いわば私にとつても就職論文たるの意義ともなつていたので、その論文を巻頭において、学者向きの理論的なものと、実践家向きの実際的なものとを半々ぐらゐに交ぜてみることにした。こうして書き振りも、私としては、初めての試みである。戦前の私は専門書と啓蒙書とは、全く別人の著述としか思えぬほどの隔たりのあるのを、ひそかなる誇りとしてきたが、今度の書物で、この慣行を一つ破つてみることにしたのである。それはこれからは、学者と実践家との相互協力の共同動作によってのみ実りの多き研究は可能であるとする、今や開かれ

ようとしてゐる我が国の学問界の傾向の一つの現れといつても良い。

かくして大会後無事4日を過ごし、わたくしは予定より3日を早めて、すでに下稿の完了を見るに至ったのである。これで「開頭」と「親と子」の原稿をそれにく続二日間で書き上げて、なお二日後には、夜行の急行「日本海」で「東北の旅」に出立した。

昭和13年の夏、「学問方法論」を16日間で書き上げて以来のことである。しかも今回は、思いもかけず、いちどに二冊の書物の下稿が出来上がったのである。もちろんとも下稿ゆえ、訂正ののち、出版となるのはおそらく明年になるのではないかと思う。

だがとにかく、久しぶりに書物を書いてみて、少なくとも執筆という点では、自分がまだ豪も衰えていないことが分かったといつてよい。それどころか、今回の著述ほど猛スピードで書いた経験は持っていない。私はここ両3年で健康状態は、生まれて以来一番調子の良い事は

自らも感じており、他人にも語ってきたことであるが、しかしこの年になって、一度に二冊の書物を書くだけの、心身のエネルギーを蔵していようとは、実は我ながらまったく予想しないことであつたと言つてよい。

さて今年の経験によつて、新たに私の悟つた事は、明年から夏休みは今年のように一切の講演等の他出を断つて、著述に没頭するのが、鎖夏法として実に最上の方法ということである。全く猛暑の中を日々一心不乱に一切の雑念を去つて、万縁放下、執筆三昧に過ごすことほど、私のような者にとつて、相応しい鎖夏法はないということを悟つた次第である。

「臨終一念の念仏」という言葉もあるが、この年になって、やつとこのような真理を体得できたという事は、私という人間が、いかに凡下の素質かということを示すものではあるが、しかしそれにしても、とにかく、この一年の体得が出来たという事は、晩年の私の生活の上になら一大革命を生じるといつても必ずしも言い過ぎではないかもしれない。

(昭和30年10月5日発行「開頭」通巻第90号10月号)
あとがきに替えて

森信三先生の執筆スタイルは、机上に「正法眼蔵」二冊を置き、その書のリズムを体幹に味わいつつ、筆を運ぶのであつた。初めての教育書執筆の際のエピソードを淡々と述べられている。が愚生の思うのは、もう一つの執筆スタイルである。すなわち「ウサギの糞」のように小口の文章を少しずつ書き加える、というのではなく、日頃著作の全体構成等を温めておいて、機会がくれば一気に呵成に書き上げるといふスタイルである。頭上から著作の全体を俯瞰しつつ、蚕の糸が果てしなく出てくるように一気に全体を書き上げるというものらしい。さすが、一流作家も斯くあるのかなと思う。愚生はご多分に漏れず、ウサギの糞タイプだろう。

(30日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin